

2019 年度第 4 回研究例会

2019 年 11 月 27 日（水）16:20~17:50, 於 社会福祉学部棟 201 講義室

<第 1 報告>

報告者：川乗賀也准教授

題名：「これまでの地域共同研究について——若年層の悩みに関する意識調査を中心に」

【要旨】 本報告では、これまでの地域共同研究での成果や、現在おこなっている「ため込み症」の評価尺度の開発について経過報告をした。地域共同研究では H27~28 年に NOP 法人や盛岡市と共同で社会的ひきこもりについての実態調査や事例集の作成をおこなった。社会的ひきこもりは社会に潜在しているがゆえに実態把握しづらく推計された人数は最低限であると認識する必要がある。また、事例の作成段階でご協力いただいた、ひきこもり経験者の話から不登校が 1 つの兆候と考えられた。社会に潜在する以前の在学中から支援者が適切にかかわれることにより将来のひきこもりリスクを軽減できる可能性がある。

次に、ため込み症（いわゆるゴミ屋敷）の評価尺度の開発について、これまで客観的に程度を評定する尺度がない。現在は民生委員、社会福協議会、行政の協力を受けながら該当する住宅に訪問し調査をしている最中である。経過として 27 件の訪問を終了し継続して調査をおこないながら、内的整合性、信頼性と妥当性の確認をおこなっている。



<第 2 報告>

報告者：櫻幸恵准教授

題名：「アクティヴ・ラーニングのその先へ——ニュージーランド
研修・2 年間の実践報告」

【要旨】 本報告では、試行実施中のニュージーランド研修の目的、プログラム構成、具体的な展開、現時点の成果と課題を報告した。単なる海外視察研修とは異なり、子どもの貧困解決に向けた地域実践学習とニュージーランド研修を並行実施する点に特徴がある。PBL=社会課題解決学習を基盤とし、学生は課題を自らリサーチし、解決策の企画実践を通してソーシャルアクションの手法を学ぶ。教員は単なるガイドである。課題解決に向け、クライストチャーチ市で子ども家庭福祉の先駆的实践や自律的な資金獲得(ファンドレイジング)を体験学習し、そこで得た視点や自律的資金を活用し、昨年度は帰国後に NPO 法人等と連携しインクルーシブな場をテーマに子ども食堂 (Kiwi 食堂) を実践、大きな反響を得た。ICE モデルによる学生自身の学習評価も高く、「理想の保育所を建てる」「つくる SW を実践する」など意識変容も見られ一定の成果があった。プログラム精査と評価指標の検討が今後の課題である。

